

# エジプト学研究別冊 第1号

(1995-2)

The Journal of the Egyptian Studies

<Occasional Publication No.1 >

## CONTENTS

本研究会開催の趣旨 .....	吉村 作治	1
司会挨拶 .....	長谷川 奏	2
調査の経緯と出土遺構の概要 .....	長谷川 奏	3
 <セッション1>		
レリーフブロックからの壁面装飾の復元考察 .....		8
1. 出土位置とモチーフの関係 .....	齋藤 正憲	10
2. プランBのモチーフ装飾 .....	磯部久美子	13
3. プランAのモチーフ装飾 .....	高宮いづみ	21
 <セッション2>		
遺構の建造から破壊にいたるプロセスと年代軸の再検討 .....		30
1. プランA周辺における .....	藤田 礼子	32
2. プランB南側地区における .....	白井 則行	37
3. プランC周辺における .....	長谷川 奏	39
 <セッション3>		
石造建築物をめぐる建築学的問題 .....		44
1. 出土建築遺構の建築学的考察 .....	柏木 裕之	46
2. 出土建材の分析 一柱の復元的考察一 .....	草原 千裕	52
3. ヒエラティック・インスクリプションについて .....		
.....	西本 真一	56
短評 1 .....	近藤 二郎	62
2 .....	中川 武	65
総評 .....	吉村 作治	67
参加者名簿 .....		69
編集後記 .....	吉村 作治	70

# 「魚の丘」遺跡出土建築役物片について

西本 真一\*

Some remarks on the painted plaster at Kom al-Samak (5)

## Notes on the Architectural Fragments from the Desert Altar "Kom al-Samak" in Malqata South

Shin-ichi NISHIMOTO\*

### Abstract

The architectural fragments found at the desert altar, so-called "Kom al-Samak", in Malqata South are observed and discussed in detail in this paper, along with introducing much resembling painted plaster denuded at the Malqata palace located approximately 2 km to the northeast from the altar. Initially the original position of corner fragments is presumed to have been derived from the lintel of doorway, based on the traces of wood imprint visible on the reverse side. On the large torus fragment it is natural to suppose to have belonged to the main entrance of the building, however the original form should be elucidated that the torus would have run horizontally and ended on both sides, evidenced from the traces of painted cavetto cornice above and the presence of the end of torus molding on the left. In the case of the desert altar, no stone door-jambs seem to have been used, as well as the case of the main palace of Malqata, attested by the imprint of wooden round beam. Concerning the study to render the reconstructed original form of the altar, several buildings including the throne dais and other platforms are mentioned for reference. A comprehensive topographical investigation, in particular on the ancient causeway and "the sun temple" referred by C. Nims and W. C. Hayes, is still awaited, and the function of this small building should be determined under the context of the whole structure of the palace-city, with comparing some parallels of the New Kingdom.

\* 早稲田大学理工学部助教授

\* Associate Professor, Department of Architecture, Waseda University

### 1. はじめに

「魚の丘」建築から出土した多量の彩画片については、これまで吉村作治先生が中心になられて報告書『マルカタ南〔I〕— 魚の丘 — <考古編>』や「彩画片に関する総括」などで研究経過の報告がなされてきたが、詳細をまとめた報告書『彩画片の研究〔I〕』が最近刊行され、彩画片の大半を確認することができるようになった。また画像学研究会においても彩画片を巡る分析結果について発表が重ねられており、描かれた人物像や器物の概要、あるいは彩色画の下地層などに関する重要な情報もたらされている。一方、建築学的研究についても渡辺保忠先生によって2期に分かれる建造過程が10年ほど前に考察され、報告書『マルカタ南〔I〕— 魚の丘 — <建築編>』の中で復原図が提示された。これらの成果を踏まえつつ、ここでは主に建築役物片を考察の対象として、そこから想起されるさまざまな問題について触れることを試みたい。

「魚の丘」建築の調査終了後にはマルカタ王宮の調査が開始され、ここからもおびただしい量の彩画泥片が出土した。この調査には彩画片の模写班の一員として私も加わっており、王宮の彩画片についても適宜紹介するとともに、比較検討を進めることとする。

### 2. 建築役物片について

建築役物片と呼んでいるのは立体的な形状をしており、色が塗られた仕上げ面を複数持っている断片で、その独特の形状や彩色文様から判断をおこなうことで建物における本来のおおよその位置を特定することができる。建築学を専門とする者にとっては建物を復原する上で、表面に描かれた彩画モチーフよりも彩画片の裏面にうかがわれる痕跡や断面に観察される泥層の様相の方が重要な事実をもたらしてくれるという場合が少なくない。このため古代エジプト調査室の長崎由美子さんや磯部久美子さんに依頼して数回にわたり実際の彩画片を見る許可を得、裏面や断面の細かい観察をおこなうことができた。

「魚の丘」建築から見つかっている建築役物片について3点ほど触れてみたい。そのひとつはコーナー片で、これは鈍角を形成するふたつの彩色面を有した出隅部の断片であるが、観察をおこなったところ、裏面に丸太の圧痕が見られるものが含まれることが明らかとなった。丸太の曲率からはおおよその丸太の直径を推定することができ、これらは明らかに木の幹を角材に加工せず、丸太のまま建物の構造材に用い、その上に泥を塗って仕上げた事実を示している。いずれの場合も彩画片の裏面には比較的滑らかな木肌の圧痕がうかがわれ、「彩画片の研究〔I〕」、写真図版16の001881はその典型である。古代エジプトの日乾燥瓦造建築において木材は、扉や窓といった建築部位を作り出すのに不可欠な材料であったが、主に家屋の基本的な骨組みをなす材料として、柱や天井を支える梁などに用いられた。また壁体に開口を設けた際、その上部に水平に架け渡す横木、つまり具体的には窓や戸口の上部を支えていたまぐさなどとしても使用された。「魚の丘」建築のコーナー片と良く似た彩画片はマルカタの主王宮か

らも出土している。裏面に丸太の痕跡が見られるコーナー片が本来は建物のどこに位置していたのかという問題については、これらはもちろん壁面の隅角部ではなく、天井を支えた梁、あるいは戸口や窓などのまぐさの2つをとりあえず想起することができよう。かなり断面の大きな丸太が用いられているところにも注意しておく必要がある。梁の例として、アマールナ型住宅から見つかったものを挙げる(図1)。特に住宅 U.33.9 の例が注目される。ここでは彩色が施されていた梁の側面と下面の図柄が繋げられて表示されており、梁の中に入っていた丸太に関しては図示されていないが、梁の側面と下面のなす角度が97°であったことが示されている。泥プラスターを塗って仕上げる時、このように鈍角に仕上げるのがしばしばおこなわれた。「魚の丘」建築のコーナー片でもほとんどの場合、鈍角となっている。しかし日乾燥瓦造建築

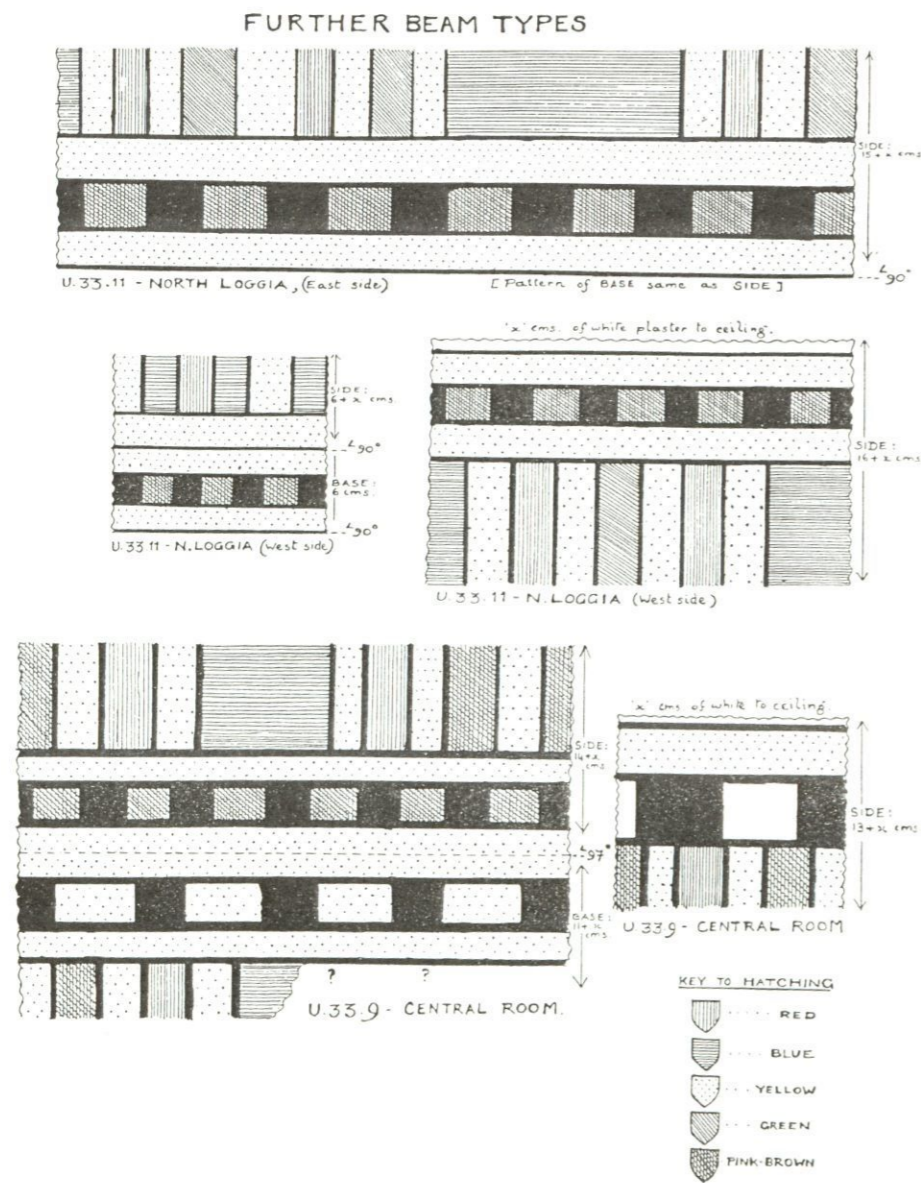


図1：アマールナ型住居における梁の塗り分け

ではすべてこのように仕上げられたかという点に関しては検討を要し、例えば王宮内には見せかけだけの、壁面を二重に少し凹ませて造った盲扉というものがうかがわれるが、ここでは入念に隅角部がほぼ直角に仕上げられている。また珍しい彩画片としてはカルトナーージュのように、壁に薄いガーゼのようなものを泥層の上に白いプラスターで貼って堅牢性を得ようとした痕跡の見られるものも見つかっており(写真1)、建築部位によって、あるいは目的によって、仕上げ方法を異ならせていたことが了解される。日乾燥瓦造では隅部が必ず鈍角に造られるというわけではないように思われる。



写真1：薄布とプラスターで下地を施された彩画片 (マルカタ主王宮出土)

さてふたつめは報告書の中で「変わりボーダー」として分類されている特徴的な幾何学文様を持つ一群の彩画片で、色彩の配列や色帯の幅などから2種類が確認されており、コーナーやトラスと接続することが分かっている断片が含まれる。これと同じ水平の縞模様からなるモチーフがやはりマルカタの主王宮からも出土しているが、しかしそれよりもまず参考とすべきなのはイギリス調査隊やドイツ調査隊によるアマールナ型住居の復原図であり、前述の図1において梁にこの模様と似たモチーフの、幅広のブロック・ボーダーらしきものが見られ、また戸口部分の抱き、すなわち戸口として壁体を開けられた開口部の左右の側壁面(図2)、あるいは戸口上部(写真2、図3)などにもこのモチーフをはっきりと見ることができる。戸口部分の抱きに施されるモチーフについては例えばマディーナト・ハーバー(ラメセス3世葬祭殿)などで注意して観察すれば、同様の幾何学文様を簡単に見つけることができよう。面白いことにこのモチーフは扉板の横棧に合わせて設けられた壁面の凹みに由来すると考えられている。古代エジプトにおいて扉板は、垂直方向に平行して並べた木の板に横棧をいくつか打ちつけることによって作られた(図4)が、この横棧の打ち付けられた面が扉の裏側に該当し、扉を開けた状態では横棧のある裏面が戸口の抱きにぶつかることとなる。この横棧の位置に合わせ、水平の溝が何本も扉の脇の壁面に彫り込まれている古王国時代の墓が報告されており(図5)、この溝が水平の縞模様に変化していったと考えられている。

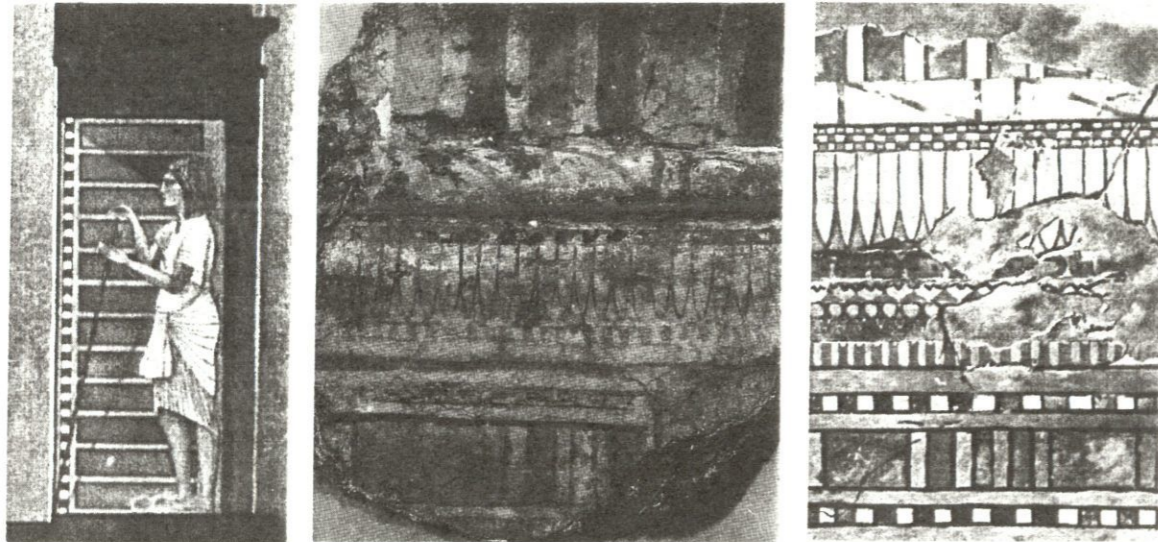


図2: 戸口抱き部分の彩色

写真2: 戸口上部の建築装飾、アマルナ型住宅

図3: 戸口上部の建築装飾、アマルナ型住宅

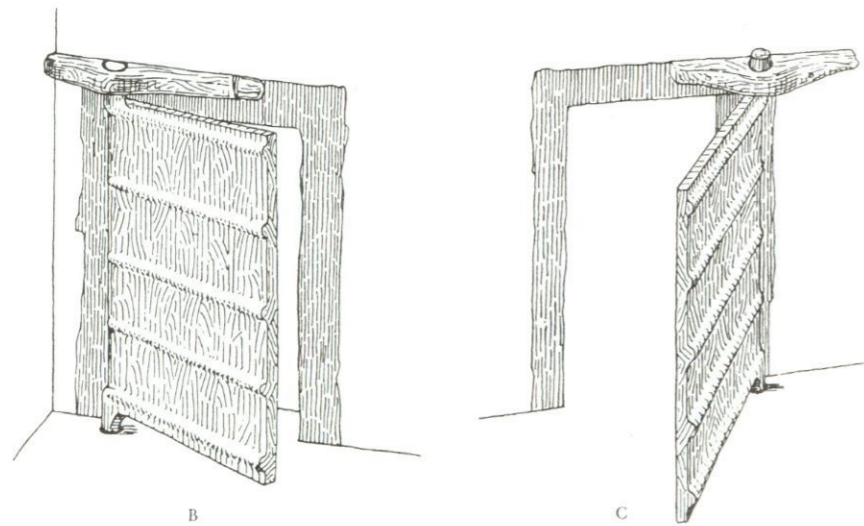


図4: 中王国時代の家屋模型における扉

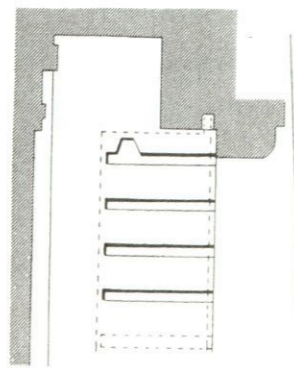


図5: ギザにおけるマスタバ入口部の例。レプシウスによる

マルカタ王宮から見つかっている代表的な2例を示す。最初のもは倉庫の入口近くで発見された、比較的大きいもの(写真3)、またもうひとつはH室と呼ばれる列柱大ホールから見つかったもの(写真4)で、わずかに彩画面が反って湾曲している点が注目される(写真5)。後ほどこの点については後述したい。



写真3: マルカタ主王宮出土彩画片(M5室)

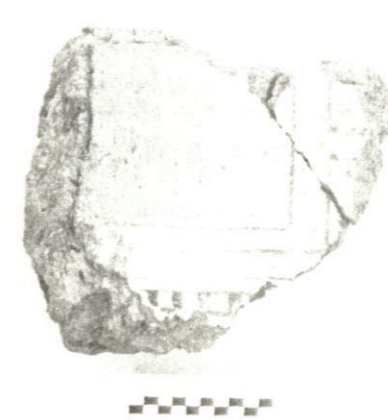


写真4: マルカタ主王宮出土彩画片(H室)

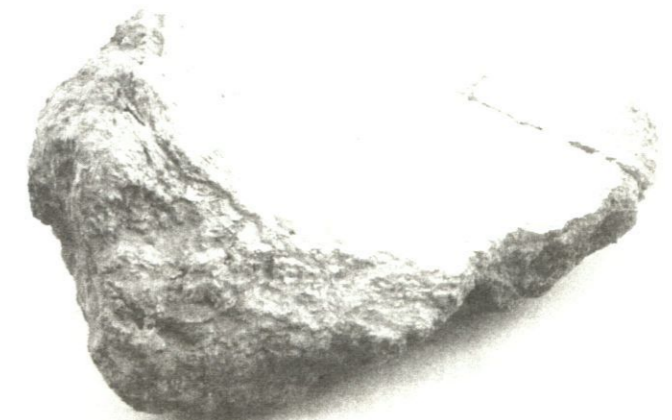


写真5: マルカタ主王宮出土彩画片(写真4の彩画片を斜め上より見る)

3番目はやはり建築役物片であるトラス片である。非常に大きく立派なものが「魚の丘」建築からは出土しており、これに匹敵するものはおそらくマルカタ王宮からもまだ発見されていない。例えば『彩画片の研究〔1〕』写真図版12に掲載されている最も大きい断片のトラス片600995には、コーニスが接続していた痕跡が認められるので本来、開口部の上にあったものと推測される。かなり大きいため、おそらく主入口の上にあったものと推定される。また実際の断片を観察すると、向かって左にトラスの端部が残存していることが了解され、そこでトラスは終わっていたことが明らかである。たぶん主入口の上に水平に施されていたこのトラスは、さらに上にはコーニスを載せ、戸口の幅ほどの長さを持っていたが、戸口の周囲三方を囲んではいなかったと結論される。『彩画片の研究〔1〕』では泥によって作られたトラス片が大きさによって2種類に分かれることを記しており、小さい方が高さ30mmで径60mm、大きい方が高さ35mmで径80~85mmと述べられている。主入口の上部にあったのはこの大きい方であり、小さいトラス片が出土しているという点は、他の出入口が存在したらしいこと、また大きさはおそらく主入口よりも一回り小さかったらしいことを伝えているように考えられる。小さい方のトラス片では高さが径の2分の1となっており、壁面に施されたトラスが有する半円筒形の形状からすればこちらの方が正式なのであろうが、大きくなると泥塊の自重でトラスの盛り上げが垂れ下がるため、主入口上部にあったと思われる大きいものでは高さ、すなわち壁からの出が径の2分の1よりもさらに低い値に抑えられたと見ることができる。

以上、ひと通り「魚の丘」建築から見つかった3種類の建築役物片を紹介した。まだ断定はできないものの、いずれの場合も戸口に関わる可能性はきわめて高い。コーナー片のいくらか、また「変わりボーダー」のいくつかはアマルナ型住居の場合のように天井の梁材からもたらされたものかもしれないが、しかしトラス片とともに出土した断片についてはこの可能性を排除することができるように思われる。

主入口の上部にあったと思われるトラス片の出土などから考えて、「魚の丘」建築の基壇の上には確かに建物が載っていたらしいことが分かる。その建物の入口には石製のまぐさは使われず、木と泥とで造られていたはずで、従って石の方立も用いられなかったと推定される。主入口のトラスは上部にのみ施され、報告書『マルカタ南〔1〕— 魚の丘 — <建築編>』の復原図にあるように主入口の周囲三方を巡るものではなかったと考えられる。

石で戸口を造らない日乾煉瓦造建築の例は、さほど多くは残っていない。どちらかと言えば、良く知られているのは戸口の両脇に石製の方立を立ててその上部に石製のまぐさを架け渡した例で、規模の大きいアマルナ型独立住居やテーベのマディーナト・ハーブー(ラメセス3世葬祭殿)の付属宮殿では、彩色入りのヒエログリフも刻まれた堂々としたその典型をうかがうことができる。木は腐りやすい上、何よりも蝕害を被りやすく、加えて木材が貴重であったから再利用に供されるなど、大きな部材が残存することはきわめて稀で、このため遺構例としては戸口の下に敷かれた石、すなわち敷居の石に残るほぞ穴や、方立による壁体に残った凹みの形状

などからの復原に頼ることになる。木材を用いた戸口方立の存在が確認されている例としては、それほど規模の大きくないアマルナ型独立住居やデール・アル=マディーナの住居などを挙げる事ができる。アマルナ型住居における木材を用いた戸口の復原考察は、ごく最近もイギリスの調査隊によって発表がなされた。

ここで問題となるのは、格式の高い日乾煉瓦造建築の場合には、戸口は石材で造られるべきなのではないかという点である。確かに通説では、建物内の要所に石材を使用することが社会的に高い地位にあることの表徴であったとされており、木と泥で戸口を造るのは、いささか格落ちした建物の場合であるという印象が拭えない。しかしここで興味深いのは、マルカタの主王宮でもまた石製の戸口方立を用いた痕跡が見られないという点で、マルカタ王宮からも多くの建築役物泥片が見つかるが、残存する壁体の状況などと考え合わせると、アメン神殿では石製戸口の使用が認められるものの、少なくとも主王宮やその東翼などでは、石製の方立はまったく用いられなかったと断定しても差し支えないように思われる。

泥と木で造られた戸口に関しては類例が少ないために、まだまだ不明な点が多数あるが、ここで試みにマルカタ王宮の「王の寝室」の戸口を復原してみることとする。現状は写真6のようになっており、下に設置されていた敷居の石も失われている。これは再利用のために収奪されたと考えられ、王宮の他の場所でも敷居の石は稀にしか残存していない。注意すべきは戸口の抱きがごくわずかに湾曲して突出している点で(図6)、先ほどの列柱大ホールから出土した



写真6: マルカタ主王宮「王の寝室」入口

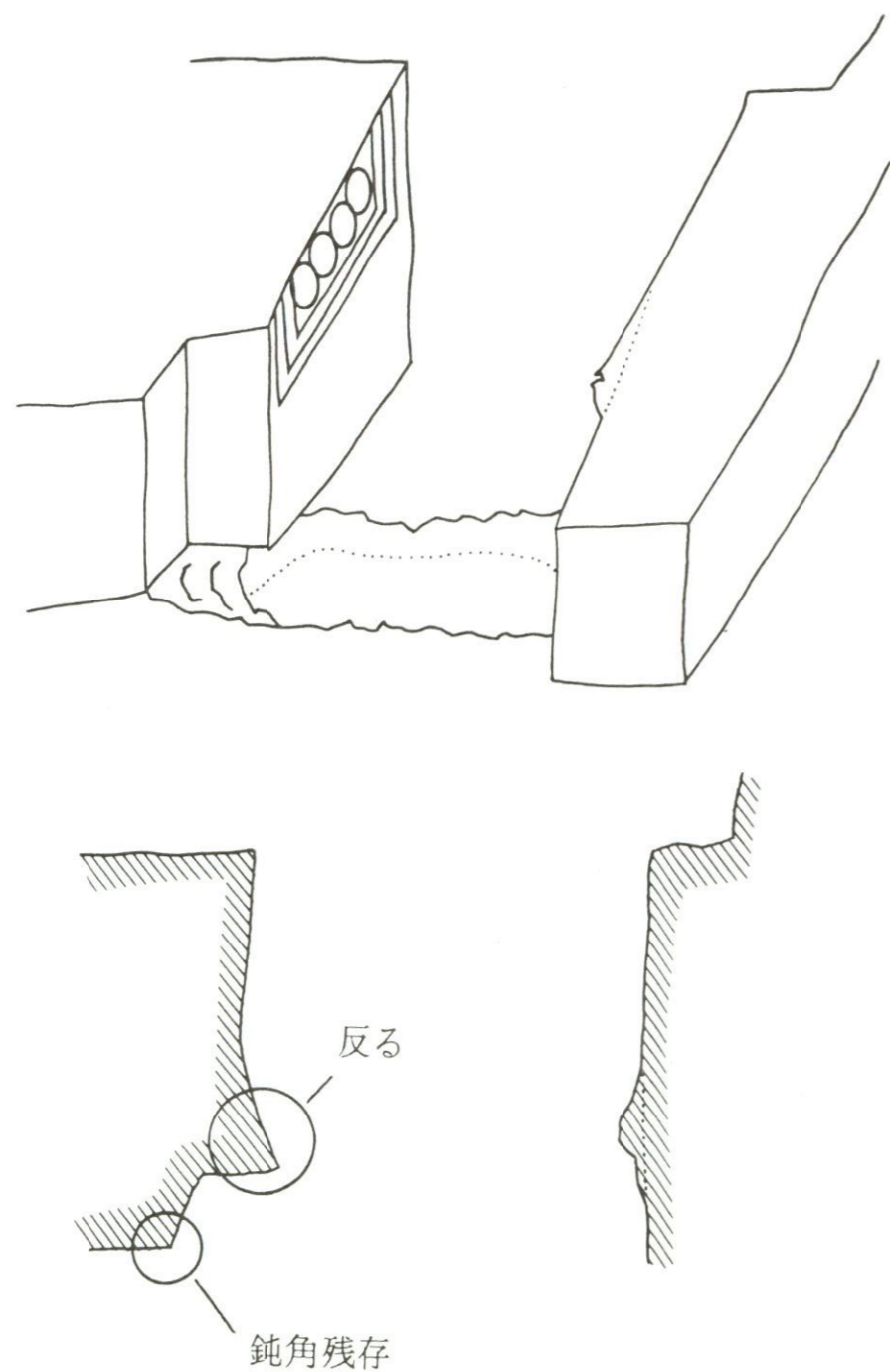


図6：マルカタ主王宮「王の寝室」入口見取り図

彩画片と共通している。次の写真もまた主王宮東翼と呼んでいる場所であつかわれる戸口の部分で、ここには扉の軸受け穴が複数残っている(写真7)。おそらく、ある期間の使用の後、磨耗のために軸受け穴が深く大きくなって扉が沈んでしまい、うまく扉が動かなくなったので、新たに穴を開けて扉軸をそちらに移したのだと考えられる。大きい穴がまず先に使われていたのであり、次に後から小さい軸受け穴の方が用いられたのであろう(写真8)。扉当てとなる方立があったと想定される反対側の壁が、やはり湾曲して突き出しているのが明瞭に観察される(写真9)。突き出先にはたぶん、木製の方立が垂直に嵌められていたはずである。入隅部分でこのように泥プラスターを厚めに塗るのは日乾煉瓦造建築の特徴のひとつで、壁と壁が交差する部分だけではなく、壁と床が出会う部分などでも泥プラスターが厚めに施された。このために入隅部分に向かって、壁や床がわずかに湾曲する形状となる。なお比較資料として、典型的なアマールナ型住居の図面も掲げておく(図7)が、残存する敷石、またそこに観察される方立の立っていた痕や扉の軸穴などから、ここでは扉はすべて内開きで、外から向かって右側に扉の軸があったことが分かる。以上を勘案して想定される「王の寝室」入口の復原図を掲げておく(図8)。



写真7：マルカタ主王宮東翼、戸口痕

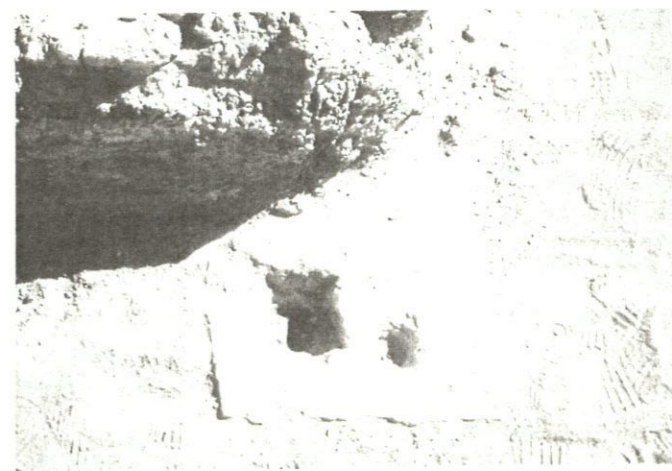


写真8：マルカタ主王宮東翼、残存敷石



写真9：マルカタ主王宮東翼、残存敷石に対応する壁体の痕跡

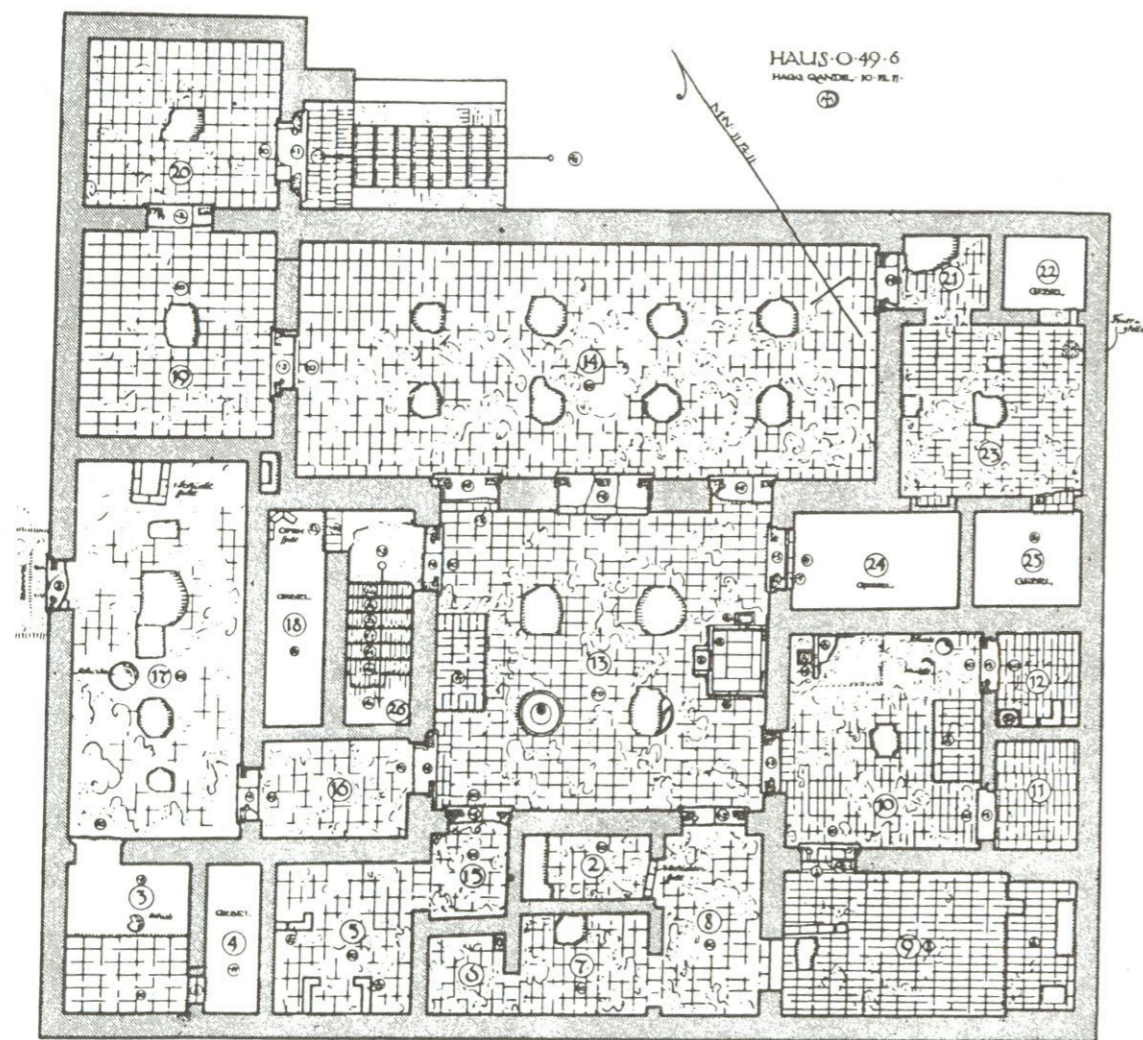


図7: アマルナ型住宅(O.49.6)

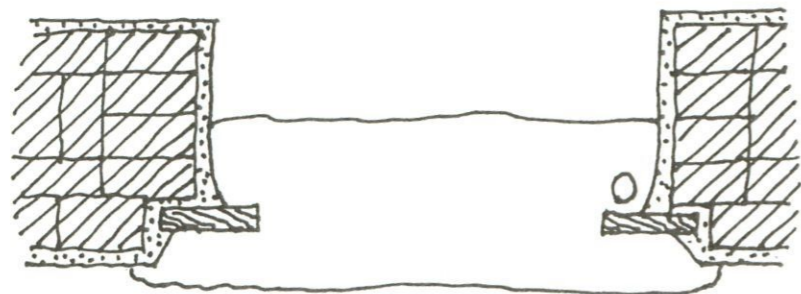


図8: マルカタ主王宮「王の寝室」入口復原図(平面図)

戸口の上部に水平に渡されたまぐさについては、昨年末のマルカタ王宮調査の時に建築班の柏木弘之君と一緒にいろいろ考えてもらい、半分に挽き割った丸太を図のように用いたのではないかと推定してみた(図9)。この方が丸太の上に日乾煉瓦を置きやすいわけで、正確なことはもちろん分からないわけであるが、目下のところ、このような復原図の作成を進めている。

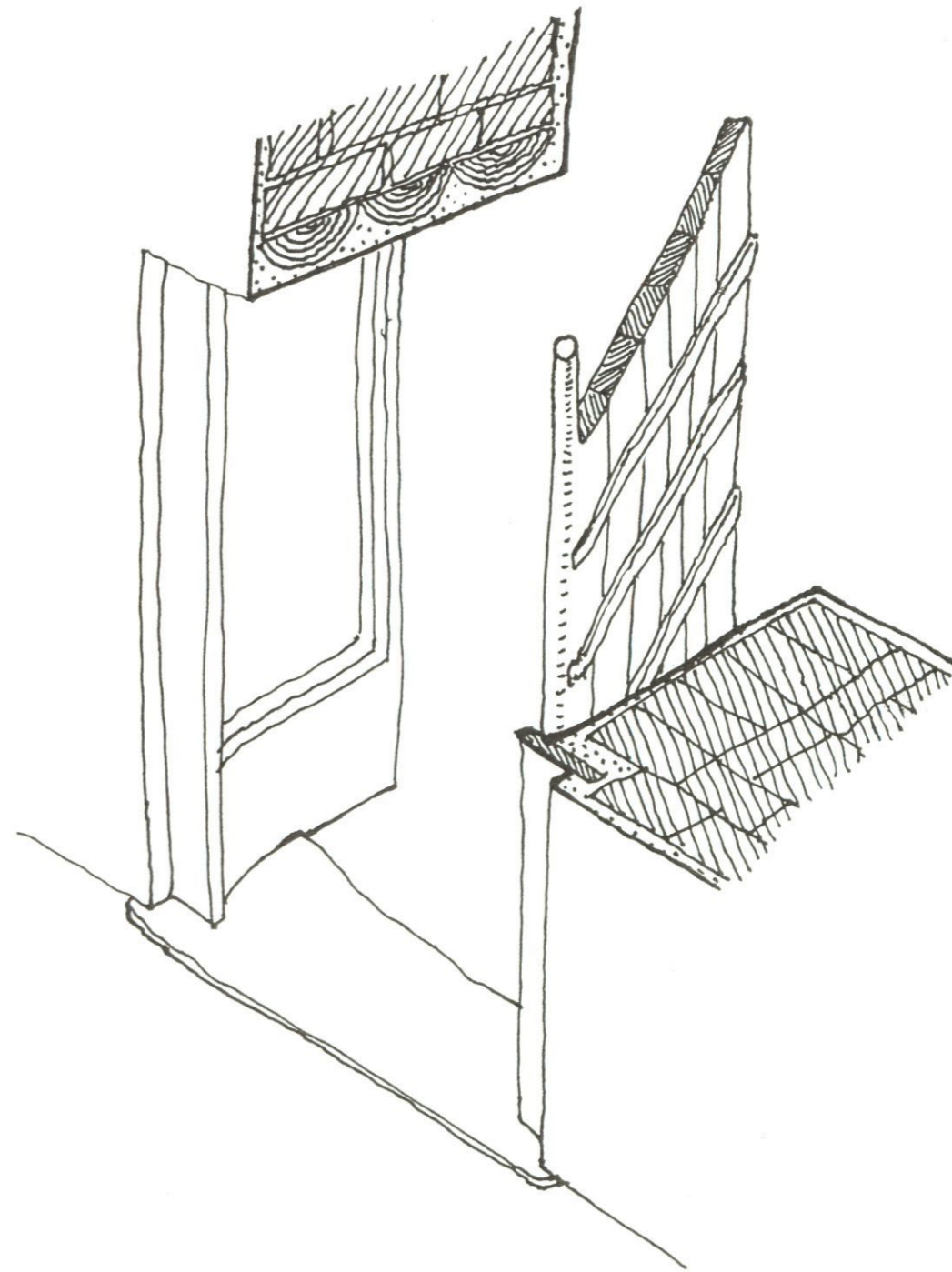


図9: マルカタ主王宮「王の寝室」入口復原図(アクソノメトリック図)

トラスについては、「魚の丘」建築の主入口では戸口の周囲三方を囲む形式ではなかったと結論したが、その判断の根拠に挙げた端部を有するトラス片が実際に出土しているという他にもうひとつあり、マルカタ王宮の場合も戸口の周囲三方をトラスは囲んでいなかったと判断されているという事情がある。マルカタ王宮の場合には壁体の下部が数十cmほど残存しており、彩色もしばしば残されているのだが、戸口部分においてトラスの特徴的な形状や彩色があったことを示す痕跡が今のところ見つかっていない。さらには「魚の丘」建築の場合と同じように、トラスの端部が実際に出土しているため、トラスが入口三方を囲む形式はやはり存在しなかったであろうと現在までのところ、考えられる。報告書『マルカタ南〔I〕— 魚の丘 — <建築編>』の復原図では戸口の周囲にボーダーとローゼット文様が廻されているが、これについても多少異なる復原案が想定されるのではないかと考えられる。

### 3. 基壇上の建物の平面について

戸口のあった痕跡が認められるため、ある時期、基壇上に建物が存在したことが推測されるという点は今しがた述べた。これはもちろんB. J. Kempによる考察を踏まえ、コム・アル＝アブドーの基壇に張られていたというテントと異なり、「魚の丘」建築の基壇には建物が確かに存在したという違いを強調しておきたかったためである。「魚の丘」建築の南西、コム・アル＝アブドーにもまたアメンヘテプ3世による小建築が建造されており、基壇とそれに付設される数戸の住居群から成っている。この建物はかつてイギリス隊によって調査されたのであるが、当初はその存在が短く触れられたのみで詳しい報告はなされず、それをKempは再調査をおこなって考察を試みており、基壇上には壁体の存在した痕跡が見られないので、テントを仮設的に張って使用したのであろうと復原をおこなっている。ただし、P. Lacovaraは近著でこの復原案に異論を唱えており、結論が出るまでにはまだしばらくの時間がかかるかと思われる。

「魚の丘」建築の基壇上の建物に関しては、詳しいことが分かっていない。煉瓦目地を描き入れた平面図が調査時に作成されており、建築班が作成したと思われるのであるが、その一部には不備が見られ、煉瓦目地が省かれている。この建物の復原を詳細に検証するためには、まず写真類を手がかりにこの図面を完成させることが先決であるように思われる。図面を見たところ、敷石や柱礎石があったと思われる痕跡についてはまったくうかがわれないようである。これは発掘時の写真を見ても同様で、基壇の側面に良好に残る階段とは対照的に、基壇上の煉瓦敷については、あまり残存状況が良いとは言えない。壁厚は写真を見る限り、さほど厚くないように観察される。煉瓦1.5枚分ほどの厚さの壁であつたらしく、王宮で言えば主王宮東翼の壁厚に相当する。おそらく部屋の広さも、それほど大きくはなかったであろうと思われる。壁面の彩画面は徹底的に剥がされたらしく、写真にはその痕跡がまったくうかがわれない。

### 4. 煉瓦押印について

「魚の丘」建築からは煉瓦押印が3つ出土したと報告されており、それぞれにアメンヘテプ3世の名前がうかがわれたと記されている。しかし報告書に掲載されている3つの煉瓦はすべてが完形をとどめず、割れたり欠けたりするなど、損傷がうかがわれる。これだけの規模を持ちながら3つしか出土しないという数はあまりにも少なく、これらの煉瓦は再利用されたのではないかという可能性を最初に考慮すべきであると思われる。この押印煉瓦は重要な年代判定の根拠のひとつとなっているものの、出土数については不自然であると判断せざるを得ない。

残念ながら建造に使用される煉瓦の総数に対し、どのくらいの割合で押印煉瓦が用いられるのかという研究はなされていないようである。J. Spencerは煉瓦の総個数を把握することを目的として押印がなされた可能性を示唆しているが、それ以上のことは述べていない。ただし、ある建物が計画された場合、煉瓦の総数を積算したことが第1アナスタシ・パピルスからうかがわれ、オストラカの中には、概数で煉瓦と思しきものを数えたい記録を残しているものもある。

私見の範囲で、まず1986年の調査時に主王宮外周壁で発見された押印煉瓦の位置を記した図面を比較資料として掲げる(図10)。押印煉瓦の置かれた位置に、特に目立った規則を見つけることは困難なようであるが、少なくとも20~30個に1個という割合で発見されている点は了解されよう。次は王宮西住居址Aで見られた押印煉瓦の発見位置で、配置の規則や傾向は同じく不明ながら、頻出個数についてはやはり数十個に対して1個という割合であることが了解される(図11)。経年により失われた押印も考慮に入れるならば、この割合はさらに高まるであろう。最後にサイトKの場合を挙げるが、ここは王宮に付設された巨大な人造湖の湖岸の一角で、ペンシルヴェニア大学博物館の調査隊によって発掘がなされた。ここからも彩画面が出土した点が注目されるが、差し当たり興味を惹かれるのはトレンチから押印煉瓦が20個以上も出土したという報告である。同じ場所からは「王位更新祭のためのワイン」と記された土器片が多数出土したため、ペンシルヴェニア大学博物館の調査隊は、王位更新祭に用いられた小規模の建物が使用後に解体されてこの地に廃棄されたのであろうと考察をおこなっている。

これら3つの同じ王宮都市域内の類例と比較するならば、「魚の丘」建築の押印煉瓦が出土した割合は極端に少ないと結論せざるを得ない。サイトKの概報を勘案する際、解体された「魚の丘」建築がここに廃棄された可能性も検討されたが、出土した煉瓦押印を見る限り、異なるようである。



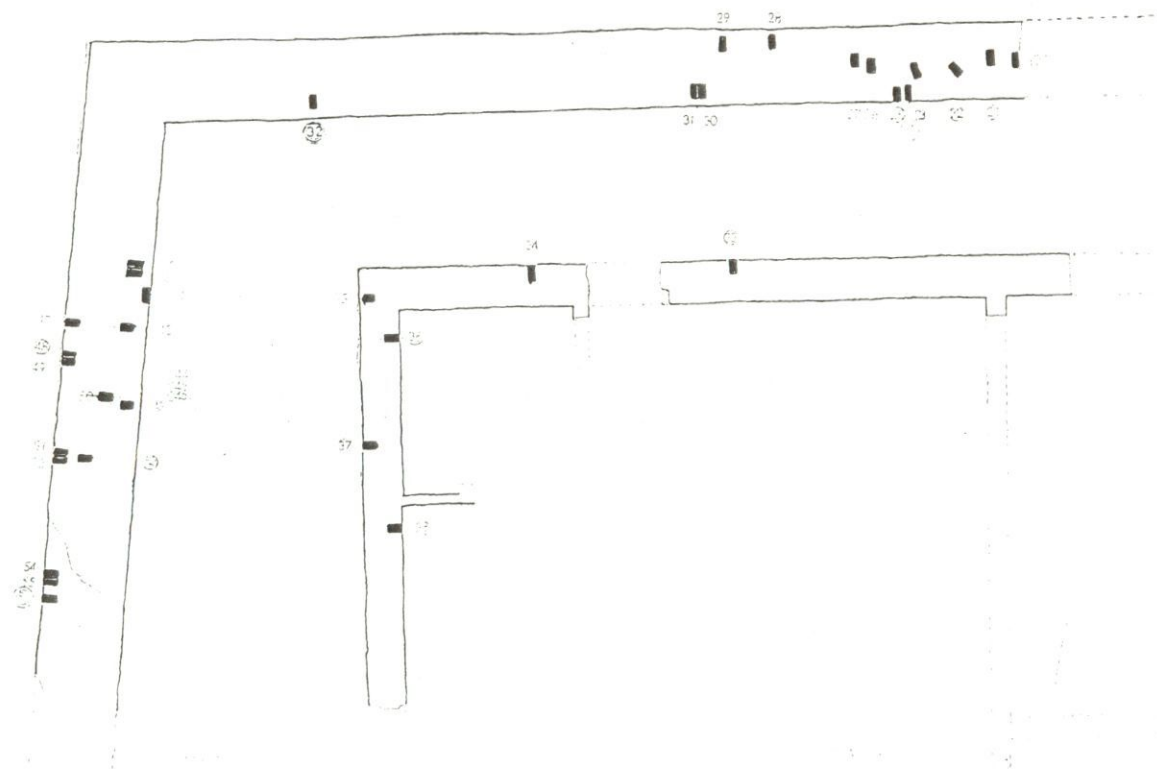


図10：マルカタ王宮外周壁における押印煉瓦分布図(1986年度調査による)

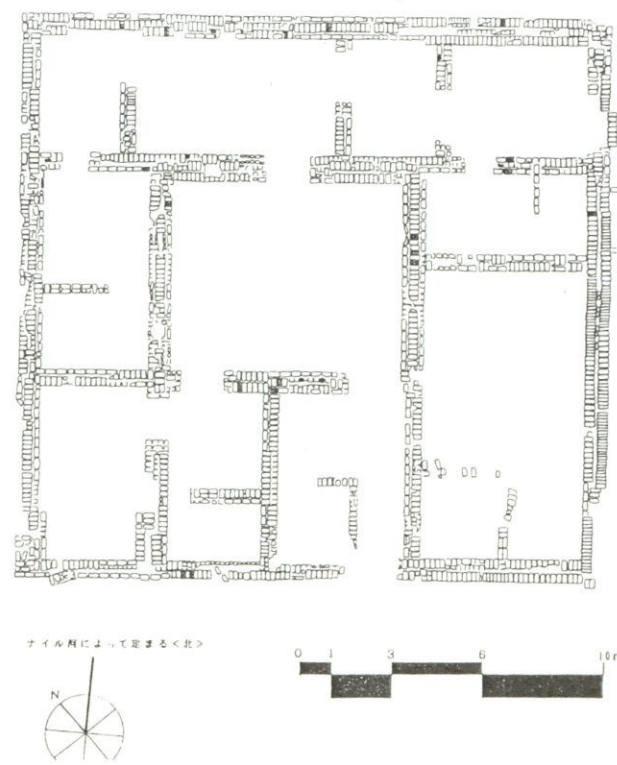


図11：マルカタ王宮西住居址独立住居Aにおける押印煉瓦分布図(1993年度調査による)

### 5. 周囲の構築物について

「魚の丘」建築を考える際に、これと関連すると思われる施設をいくつか挙げる事ができ、「魚の丘」建築の役割を探る場合、これらを勘案しながら考察を進める必要がある。

人造湖ビルカト・ハーバーには湖岸に沿って土盛りが2列、2km以上に及んで造られているが、この土盛りの延長上に「魚の丘」建築が建てられており、計画的な配置がなされたことが知られている。しかし「魚の丘」建築と王宮との関連をうかがわせるものはこれ以上、周囲に何も見当たらない。マディーナト・ハーバーの北東に位置するアメンヘテプ3世葬祭殿址近くからマルカタ王宮の西側を通ってやってくる「古代の道」は「魚の丘」建築のすぐ脇を斜めに掠めてデル・アル＝シャルウィートに続いているが、この道とどのような配置関係にあったのか、詳細は不明である。Kempは「古代の道」に関して、造営年代はアメンヘテプ3世時代ではなく、それより若干下るであろうという見解を述べており、注目される。確かにもし同時代に建造されたものであれば、もう少し建物の軸性を活かした「古代の道」との接続方法がなされても良かったわけであり、あたかも「魚の丘」建築の存在を無視するかのようによく近くを斜めに横切っていくこの道の設定は不自然に思われる。

さらには Porter & Moss に記されている、問題の「太陽神殿」が挙げられる。「魚の丘」建築の研究に携わる者にとっては非常に悩ましいこの建物に関しては、何回か現場で近藤先生とお話をさせていただいた。これは C. Nims や W. C. Hayes によって触れられている小規模の神殿で、Nims によればある航空写真でデル・アル＝シャルウィートの近くに明瞭に確認され、Hayes によればオベリスクの基台を囲む中庭があるとも記述されているのであるが、「魚の丘」建築の周囲にはそれらしい遺構は見当たらない。デル・アル＝シャルウィートのイシス神殿の建築報告書を近年出版した Ch. Zivie もまた「太陽神殿」については、イシス神殿の近辺にあったらしいと甚だ不明瞭な書き方をしている。しかしながら「魚の丘」建築の周囲にそれらしい遺構がないとするならば、「太陽神殿」と言われているものが「魚の丘」建築である可能性が逆に指摘できるわけであり、事実 E. J. Uphill は古代エジプトの王宮に関する未公開の草稿の中ですでにそうほめかしている。ところで Nims が挙げた写真については、ルクソールのシカゴ・ハウスにあることが分かっており、機会があれば「魚の丘」建築の位置が記入された広域の敷地図を持参し、「太陽神殿」が本当に「魚の丘」建築であるのかどうかを確認する予定である。現在、ジョンズ・ホプキンス大学に留学中の河合君によれば、シカゴ・ハウスの副館長 W. Johnson もまた「魚の丘」建築が「太陽神殿」であるという考えを抱いているとのことで、もしそうだとするならば、どのような根拠によって「魚の丘」建築が「太陽神殿」とみなされたのかという点はきわめて興味深い。

この他、デル・アル＝シャルウィートの波状壁体、イシス神殿の外周壁内にうかがわれる残存壁体なども興味を惹かれる遺構であり、イシス神殿近傍建物址とともにこれらすべてを1枚の中に収めた敷地図を、いずれ用意したいと考えている。いささか距離が離れるが、コム・ア

ル=アブドーや戦車を走らせたと言われる「砂漠の道」などの配置も是非、視野に入れておくべきであるように思われる。

## 6. 建築形態に基づく類例について

「魚の丘」建築のかたち注目するならば、マルカタ王宮域に建つ同種の建物として他にプラットフォームやコーム・アル=アブドーなどを挙げることができる。これらは四角い基壇のかたちをしている点が特徴で、「魚の丘」建築とプラットフォームの大きさは前者が19,200×18,832mm、高さ2,405mm、後者が18,872×13,046mm、高さ約1,800mmと、両者にそれほど隔たりはなく、「魚の丘」建築の大きさからはむしろマルカタ王宮西住居址Aの大きさ(19,660×18,840mm)が思い起こされるが、コーム・アル=アブドーの場合は44,094×39,370mm、高さ3,750mmと桁外れに大きくなり、室内と室外とを画する境界壁の厚さも2m以上と、飛び抜けた存在となっている。アマールナ型住居を思わせる内部構成を見せるが、ここで注意を向けておきたいのは寝室と推定される部屋の大きさで、この部屋の寸法を試みとして建築班の遠藤君に、報告されている平面図より算出してもらったところ、主王宮の「王の寝室」とほぼ合致した。「王の寝室」と主王宮のB室はまた同じ規模であるから、3つのひときわ大きい寝室がこの王宮都市域には存在して、そのうちの2つはアメンヘテプ3世のために造られたことがはっきりしているということになる。

プラットフォームはおそらく謁見台として使われたであろうと見なされているが、これも詳細は不明で、メトロポリタン美術館所蔵の野帳や図面を調べればもっと特徴が明らかになると思われる。このプラットフォーム上には登りの階段が数段あって、これに面して広場が用意されていたと、野帳を見た Uphill は記している。アメン神殿と主王宮のちょうど真ん中に位置するこの施設には、もっと注目してもよい。このように謁見台と考えられる施設が王宮域内には点在しており、それらがどのように使い分けられたのかが問題となるであろう。河合君からはまた、O'Connor はプラットフォームを中心に据えたマルカタ王宮の都市計画に関する論考を準備中であると聞いた。

比較のために、大きさを問わず、基壇状のかたちを呈する建物で、しかも「魚の丘」建築で見られるように、描かれたモチーフが跪く捕虜や器に盛られた花束の類に限られるという点を勘案するならば、まず思い浮かぶのは Hayes が復原図を描いているカンティールのラメセス2世の throne dais (図12) やアマールナ王宮内の謁見台 (図13) ということになる。続いて砂漠の祭壇やコーム・アル=ナーナ (図14, 15) などを思い起こすことができそうである。基壇上の建物の復原を考える場合、「魚の丘」建築ではセンウセルト1世の小祠堂が主として念頭におかれたようであるが、あるいはアマールナ型住宅に付設されていたチャペルなどを参考にした方が良かったかもしれない (図16, 17)。

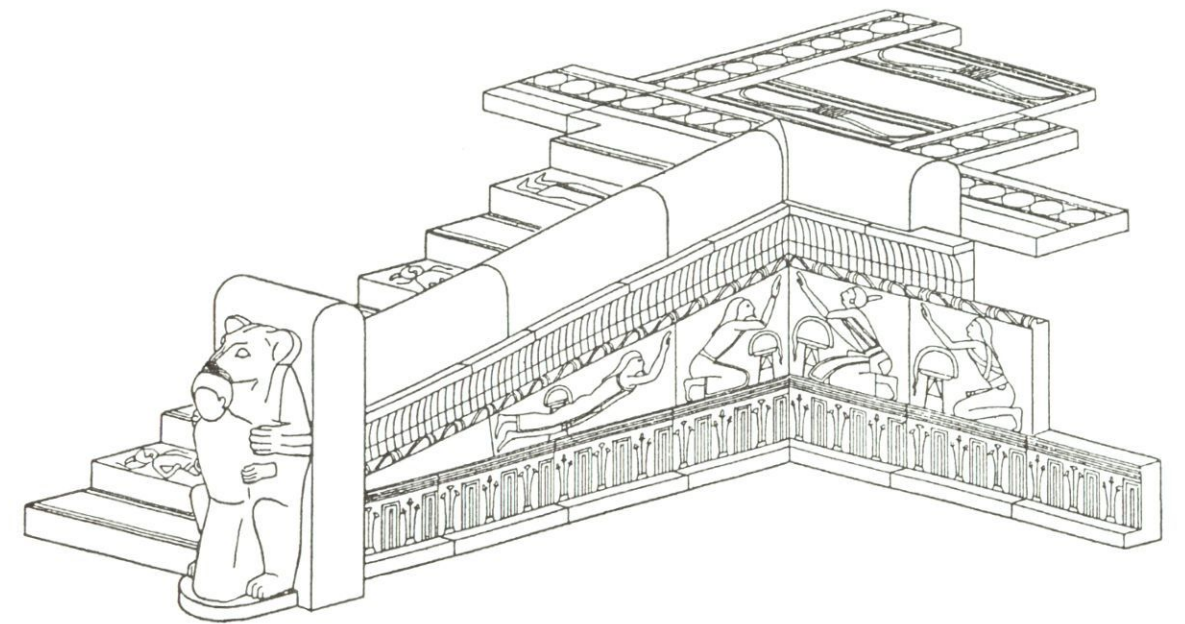


図12: Hayesによるdaisの復原図

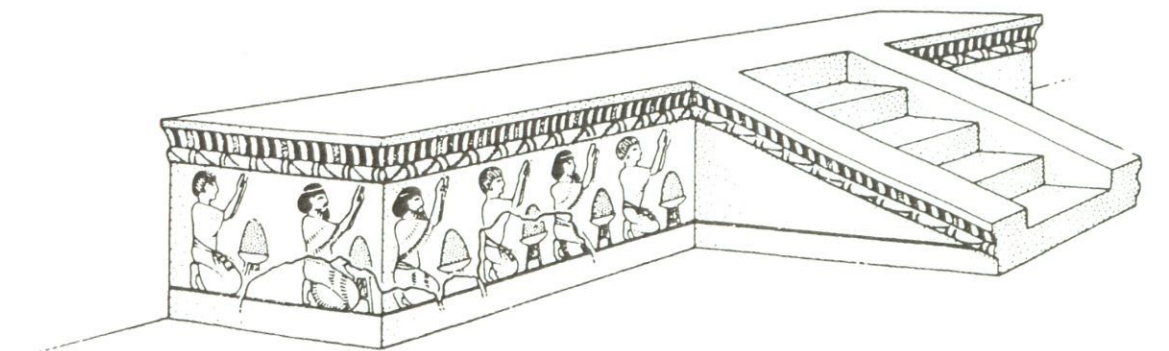
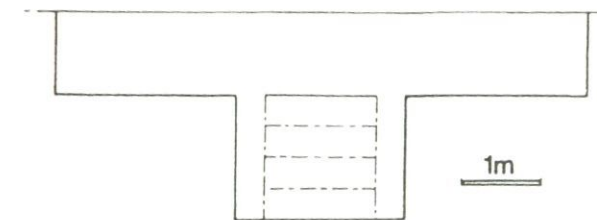


図13: アマールナにおけるdaisの復原図

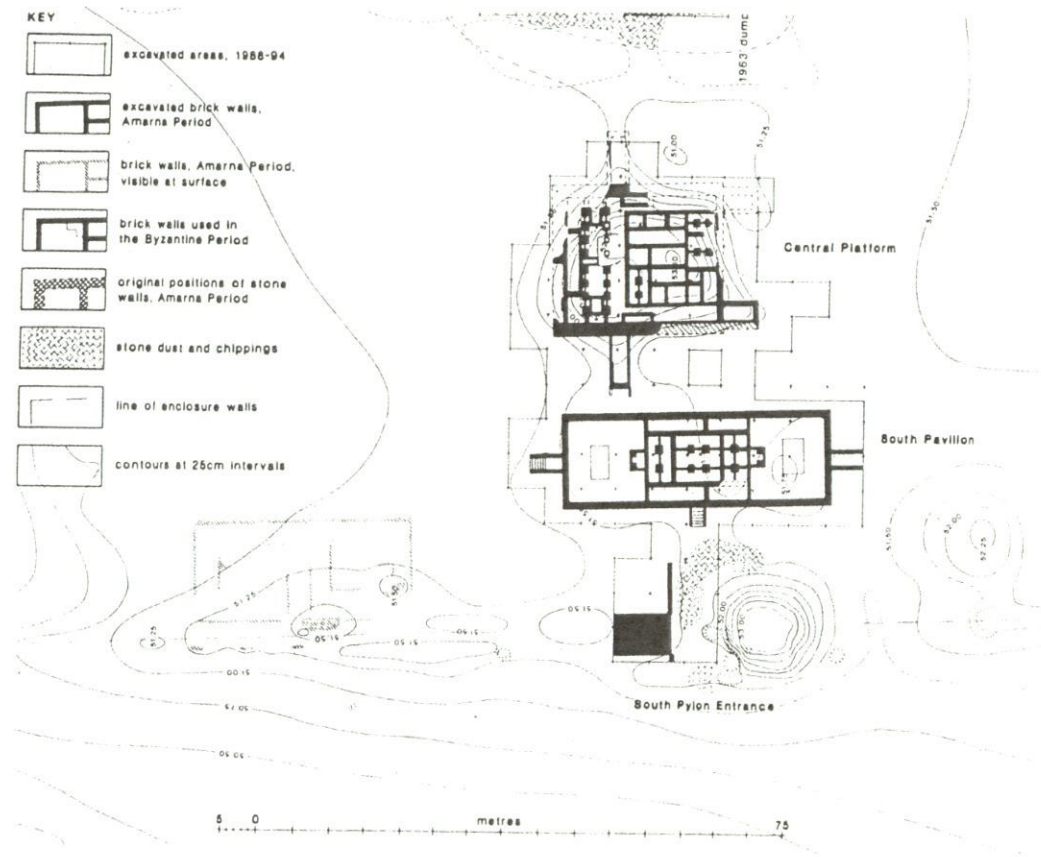


図14: アマールナ、コム・アル=ナーナにおけるプラットフォーム

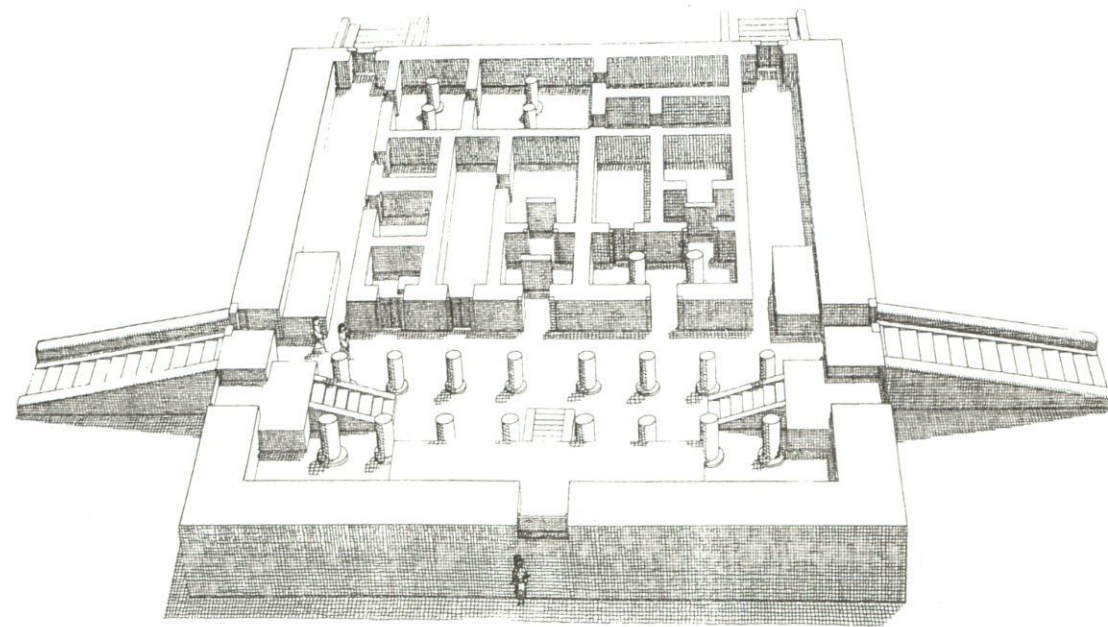


図15: アマールナ、コム・アル=ナーナ、プラットフォーム復原図

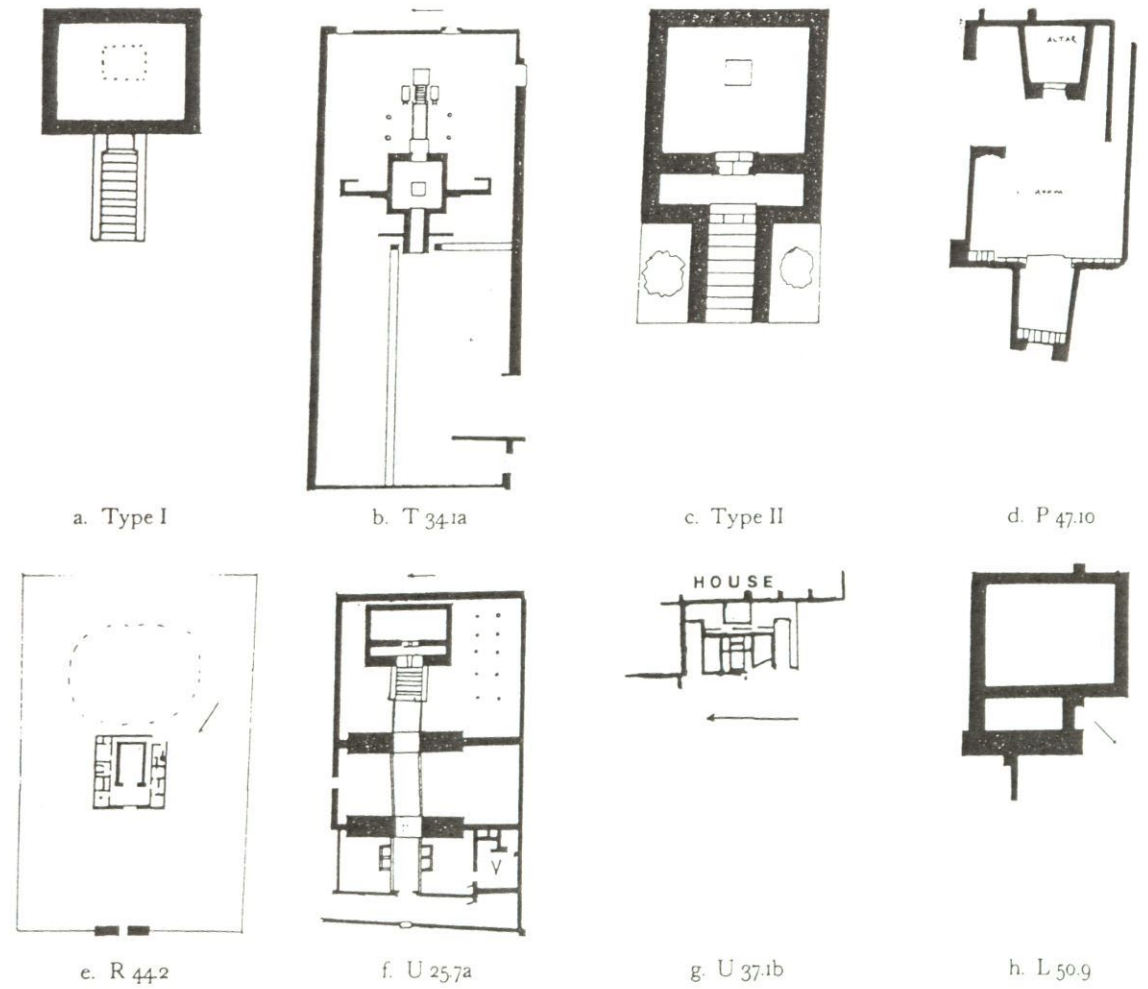


図16: アマールナ、チャペルの類例

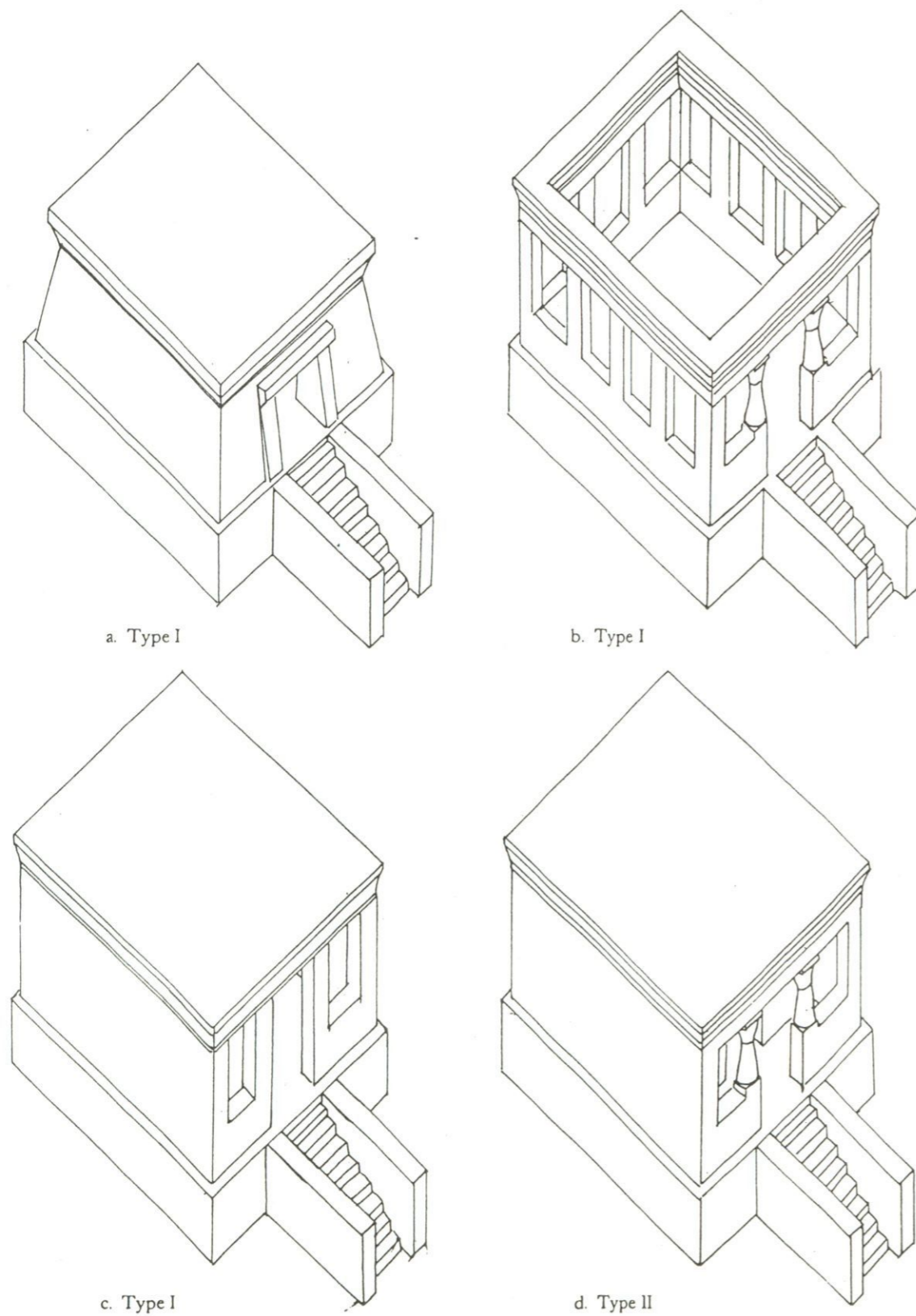


図17: アマルナ、チャペルの復原図

## 7. 王位更新祭との関連

マルカタ王宮においては3回の王位更新祭が挙行され、うち第2回目(治世第33年)はアメン神殿で執りおこなわれたと言われている。第1回目と第3回目がマルカタのどこでおこなわれたかは具体的に分かっていないが、KempによればサイトKで見つかった彩画片が王位更新祭に用いられた建物の残骸であると判断されており、文字資料をもとにして組み立てられているこの説には説得力があって、これを覆すのは容易ではない。「魚の丘」建築もまた王位更新祭に用いられた建物であると主張するには、これを裏づける文字資料が極端に不足しており、渡辺保忠先生は彩色階段の30段という段数と在位30周年という点を重ね合わせて見ることを試みておられ、これは非常な卓見であると思われるのであるが、しかしこの仮定だけでは文字資料が優先されがちなエジプト学において、主張はおそらく通用しないのではという危惧がある。

「魚の丘」建築の特質を今一度、私なりの理解で述べれば、1、残存する彩画片には文字の描かれた痕跡がまったくうかがわれない。2、跪く捕虜・異国人と器に盛られた花飾りが主たるモチーフである。3、建物には計画を一度変更した形跡がうかがわれる。4、基壇上の建物は破壊され、建物に施された彩画もまたこなごなになるまで入念に壊された、以上のようにまとめられよう。一番無難なところを言うとするならば、類例から判断して throne dais にとても近い建造物であろうと表現するのが妥当であるように考えられる。ただこの建物は throne dais としては少しばかり規模が大きく、また王の謁見やさまざまな祭儀の際に用いられたようであり、時として特別な用途のために改変がなされたと思われる。ただし、これが具体的に王位更新祭に使われたかという点になると、それを証明する手だてはほとんどない。何故基壇上の建物が破壊されたかについてはいろいろな憶測を呼ぶところであり、王位更新祭に用いられたのではないかとする考えも、基壇上の建物が入念に解体されている状況に基づいて導かれていると推測されるが、今後、王宮の類例遺構をさらに検討していく余地があるというのが私の意見である。幸い、古代エジプトの王宮に関しては近年研究がめざましく進められつつあり、P. Lacovara によってデール・アル=バラースの再発掘調査報告書や「新王国時代の王宮都市」が出版された他、イギリス調査隊が精力的にアマルナを発掘して報告を出しており、王宮に関していくつかの論考を発表している D. O'Connor はペンシルヴェニア大学博物館によるメンフィスのメルエンブタハ王宮調査の報告書の刊行を予告している。オーストリア調査隊による発掘で見えられたアヴァリスの王宮も注目され、数年前にはオーストリア隊の主催で「王宮と住居」というテーマによる国際シンポジウムも開催されて、この会議での研究発表も出版された。

あちらこちらの研究者とも情報交換をおこない、今後、徐々に「魚の丘」建築の姿を明らかにしていきたい。

## 〈引用文献と略表記〉

古代エジプト調査委員会編：『マルカタ南〔I〕— 魚の丘 — <考古編>』早稲田大学出版部，1983年。

古代エジプト調査委員会編：『マルカタ南〔I〕— 魚の丘 — <建築編>』早稲田大学出版部，1983年。

吉村作治・長崎由美子：「マルカタ南・魚の丘遺跡出土彩画片に関する総括」

『二十一世紀への考古学 櫻井清彦先生古希記念論文集』櫻井清彦先生古希記念会編，  
雄山閣出版，1993年，pp.381-397。（略表記「彩画片に関する総括」）

吉村作治編：『マルカタ南 魚の丘遺跡出土彩画片の研究〔I〕』早稲田大学古代エジプト研究報告1，  
早稲田大学古代エジプト調査室，1995年。（略表記『彩画片の研究〔I〕』）

## 〈図版出典〉

- 図1 H. Frankfort and J. D. S. Pendlebury: *The City of Akhenaten*, Part II; The North Suburb and the Desert Altars (London 1933), Pl.LVI.
- 図2 L. Borchartd und H. Ricke: *Die Wohnhäuser in Tell el-Amarna*. WVD OG 91 (Berlin 1980), p.16.
- 図3 L. Borchartd und H. Ricke: *Die Wohnhäuser in Tell el-Amarna*. WVD OG 91 (Berlin 1980), Tafel 29, F: J 53.1.
- 図4 H. G. Fischer: "Egyptian Doors, Inside and Out", in *Varia Nova*; Egyptian Studies III (New York 1996), p.92, Fig.1.
- 図5 H. G. Fischer: *ibid.*, p.94, Fig.3.
- 図7 L. Borchartd und H. Ricke: *Die Wohnhäuser in Tell el-Amarna*. WVD OG 91 (Berlin 1980), Plan 76.
- 図12 W. C. Hayes: *Glazed Tiles from a Palace of Ramesses II at Kantir*. MMAP 3 (New York 1937), p.13, Fig.1.
- 図13 F. Weatherhead: "Wall Paintings from the King's House at Amarna", in *JEA* 81 (1995), Fig.4.
- 図14 B. J. Kemp: "The Kom el-Nana Enclosure at Amarna", in *Egyptian Archaeology* 6 (1995), p.9.
- 図15 B. J. Kemp: "Discovery and Renewal at Amarna", in *Egyptian Archaeology* 1 (1991), p.21.
- 図16 S. Ikram: "Domestic Shrines and the Cult of the Royal Family at el-Amarna", in *JEA* 75 (1989), Fig.1.
- 図17 S. Ikram: *ibid.*, Fig.3.

写真2 T. G. H. James: *Egyptian Painting* (London 1985), p.39, Fig.40. EA58846, "1926-27 season, North-East Group, House A".